

研究の概要（案）

1 研究のテーマ

自分の考えを論理的に表現できる子の育成

～かく活動を通した思考の可視化～

2 研究のテーマ設定の趣旨

吉野ヶ里町東脊振中学校区は、小中各一校からなり、東脊振小学校を卒業後、東脊振中学校に進学する児童が多くを占めている。以前は、文部科学省の指定（平成 28 年度）を契機として、両校とも特別の教科・道徳を中心に研究を進め、児童生徒の心の育成を図ってきた。本校の児童は誰とでも親しく関わることができる児童が多い。その反面、友達と競い合ったり、周りからの刺激を受けたりする機会が少ないためか、学力向上を目指して自分から進んで学習に取り組もうとする児童は多くはない。また、集中することや粘り強く取り組むことが苦手なため、学習に苦手意識をもつ児童もいる。

現在、学校教育では『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実が求められている。本校においても、1人1台端末というインフラを最大限に活かし、児童一人ひとりのレディネスに応じた個別の試行錯誤（書く・描く）と、それらを即時に共有し高め合う集団の学びをいかに融合させるかが、喫緊の課題となっている。昨年度は、佐賀県教育委員会の指定を受け、1人1台端末を「学習の文房具」として日常的に活用するための授業改善に注力した。その結果、国語科や算数科を中心に、ICT を特別な道具ではなく、学習を支える当たり前の道具として活用する下地が整いつつある。一方で、日々の学習状況や学力調査の結果を分析すると、新たな課題も見えてきている。国語の読解力や、算数において筋道立てて説明する力については、依然として苦手意識を持つ児童が多い。自分の考えをまとめたり、根拠をもって伝えたりする場面で思考が止まってしまう傾向があり、学力の二極化も懸念される。これは、頭の中にある考えを「目に見える形」に整理し、再構築するプロセスがまだ十分ではないためと考えられる。

そこで今年度は、論理的に表現する力を高めるために、「かく（書く・描く）」活動を研究の中核に据えることとした。先行きの不透明な社会において、情報を単に受け取るだけでなく、自らの手で整理・分析し、新たな意味を見出す『情報活用能力』の育成は、全ての学習の基盤といえ、本校の研究の柱である『思考の可視化』は、単なるスキルの習得に留まらず、論理的思考力という一生モノの資質・能力を育むための本質的なアプローチであると考え。「かく」という具体的な行動は、曖昧な思考を可視化し、自分自身の理解の状況を客観的に捉え直させる。この「思考の可視化」を全学年共通の柱とすることで、児童が自力で考えを構築できる力を系統的に育てていく。実践においては、ノートと ICT のそれぞれの長所を最適に組み合わせしていく。ノートにじっくりと自分の考えを書き留める「内省の時間」と、タブレットを用いて他者の意見を即時に共有し、比較・検討する「協働の時間」を効果的に連動させる。これにより、個の考えを深めるとともに、集団の中で思考を広げていく授業デザインを追究していく。

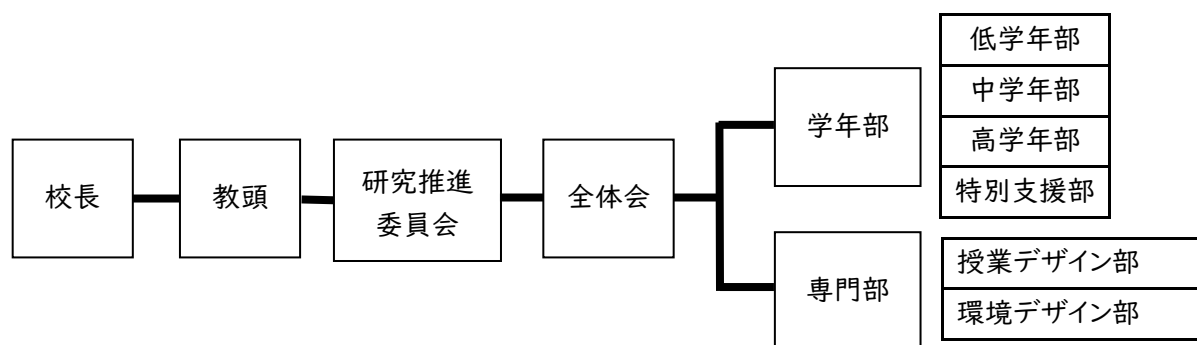
こうした取り組みを授業内にとどめず、中学校のテスト期間と合わせて取り組んでいる家庭生活がんばろう週間などの家庭学習や、各週で行っているスキルタイムや休み時間等における ICT 活用にも広げていくことで、学習の連続性を確保し、児童が「自分の考えを表現する楽しさ」を実感できる環境を整えていきたい。また、家庭学習がんばろう週間の中での学習への取り組み方や、スキルタイムの内容については児童の学習状況に応じて見直しを行いながら改善を図っていく。

以上のことから、令和8年度は、教職員一人ひとりが「思考を可視化する指導の工夫」を明確に持ち、授業改善に取り組むことで、児童の論理的表現力の育成と学力の向上を目指す研究に取り組むこととした。

3 研究でめざす児童像

【本校のめざす児童像】 「知」 …… 考えることを楽しむ子ども 「徳」 …… 自分を大切にし、友達を大切にする子ども 「体」(耐) …… 体を動かすことを楽しむ子ども		
低学年	中学年	高学年
自分の考えを理由や順序をつけて伝えようとする子ども	自分の考えを整理し、理由をつけて分かりやすく伝えようとする子ども	自分の考えを見直し、多角的な視点から論理を構築し、相手や目的に応じて伝わる表現へと高めようとする子ども

4 研究組織



学年部		専 門 部	
		授業デザイン部 (山本)	環境デザイン部 (松原)
低学年部 (中島め)	1年	中島め	宮崎
	2年	芹田	園田
中学年部 (村田)	3年	澤田	松原
	4年	村田	福田
高学年部 (野口)	5年	野口	納富
	6年	平田	北島
特別支援部 (上村)		中村、小林、中島は、塚原、戸塚	上村、納富、佐伯、原田、梅木

※ ()は各部の部長で、研究推進委員を兼ねる。

5 研究の内容と方法

- 教師の指導力向上並びに授業改善
 - ・ 授業実践(各主教科、国語、算数、理科、社会、生活、自立活動等)
 - ・ グループ研や全体研による授業研究発表
- ICT 利活用に関する環境整備
 - ・ 授業改善につながる ICT 機器の開発・検討と情報共有
 - ・ ICT 機器やアプリに関する研修会の実施(ドリルプラネット含む)
- 研究データの作成及び調査分析
 - ・ 児童及び教師への意識調査に実施と集計、考察
 - ・ 授業研究会の運営及び会場設定

6 研究計画

月	日(曜日)	部会等	内 容
4	8(水) 15(水)	・第1回研究推進委員会 ・第1回校内研(全体会)	・研究の方向性、概要についての提案 ・研究の概要について(全体への提案)
5	8(金) 27(水)	・第2回研究推進委員会 ・第2回校内研(全体会・学年部)	・組織および研究でめざす児童像の確認 ・1年間の課題(共有)および具体的研究について ・スキルタイムの教材の検討について ・【学年部】公開授業の分担 【専門部】研究計画、役割分担
6	1(月) 29(月)	・第3回研究推進委員会 ・第3回校内研(学年部・専門部)	・全体会の意見集約 ・指導案作成に向けて ・指導案の作成および学年部・専門部
7 8	8(水) 夏季休業中 26(水)	・第4回研究推進委員会 ・第4回校内研(全体会) ・第5回研究推進委員会	・指導案作成 ・指導案検討会 ・指導助言の先生方との打ち合わせ (教科、単元、使用するアプリなど)
9	2(水) 16(水)	・第5回校内研(専門部) ・第6回校内研(学年部)	・中間の取りまとめおよび考察等
10	21(水) 26(水)	・第6回研究推進委員会 ・第6回校内研(学年部)	・公開授業の資料の原案について ・指導案および教材等の作成等 ・公開授業当日用資料の作成等
11	4(水) 11(水)	・第7回校内研(全体会) ・町教委訪問	・町教委訪問当日の動線等について ・公開授業(A4・2枚程度、ICT の活用方記載)
12	2(水) 9(水) 22(水)	・第7回研究推進委員会 ・第8回校内研(全体会) ・第9回校内研(全体会)	・紀要原稿について ・各グループ研究会の記録について ・各専門部会の成果と課題について

1	20(水) 27(水)	・第10回校内研(学年部・専門部) ・第11回校内研(全体会)	・まとめ原稿作成について① ・まとめ原稿作成について②
2	15(月) 24(水)	・第8回研究推進委員会 ・第11回校内研(全体会)	・来年度の方向性について ・来年度の方向性について
3			